

ホテルのニュースレター

日本ホテルの会 2005/6 第33号

6月になると思い出す

日本ホテルの会理事 本多和彦

このニュースレターが6月発行なので、6月から思い起こすことを書いてみようと思います。

6月というのは、会員の皆さんにとって、一年の中で一番忙しい、そして楽しい月なのではないでしょうか。地域によって違いがありますが、ゲンジボタルは5月下旬から6月に発生するからです。各地でホテル祭りや観察会が開かれ、たくさんの方々がホテルの淡くて、それでいて力強い光に魅せられていることと思います。

さて、私は、港の利用や開発に関連する仕事についており、海の保全や再生に関わることに携わっています。生物屋ではない私が、生物生息環境の保全というものに出会い、港湾の業務に移ってもなお自然環境に関心を持ち続けることになったのは、ホテルとの出会いがあったからと思っています。6月になるといつもそのことが思い出されます。

今から25年ほど前、横須賀市下水道部に勤務し、家庭から発生する汚水の処理を担当



していました。当時、横須賀市の下水道普及率は50%にとどかない状況で、まだまだ川の汚れなどが解消されない、でもようやく川や海の水質がよい方向に向かおうとしている、そんな時であったと思います。若き水処理マンとしては、公共用水域の改善の最前線に立っているような気負いを感じていました。そんな時に開発が進んだ地域でコンクリート3面張りの水路をたくさん目にしました。下水道は衛生的な生活環境と水域の環境改善のために存在し、排水路は降雨を迅速に流し、洪水を発生させないためにあるものと考えられていました。しかし、毎日水を浄化しながら、水質浄化だけが我々の求めること

なのだろうかと考えるようになりました。下水道の目的は、快適な生活や海の浄化だけでなく、汚水が流れ込まなくなった小川や水路に豊かな自然がもどることなのだ、そうでなければ意味がないのではないかということに気づき始めました。こうしたときに、岩戸川にホタルを復活させるという活動に出会い、横須賀市自然・人文博物館の大場氏に出会うこととなりました。これが、私がホタルと関わりあうとともに、生き物の環境を考えるきっかけとなったと考えています。陸水の環境を下水道整備が改善し、一方で都市小河川の改修を自然共生型で行い生き物が棲みやすい環境を整えることという、車の両輪といえる対策ができる、失われようとする自然を守る方法があるということを知りました。

理屈でいうとそういうことですが、そんなことよりもっと心を揺れ動かし、環境を考えるきっかけとなったものは、仲間たちと一緒に見たゲンジボタルの光であったと思います。夜7時半ごろ、闇の中にホタルがひかり始めます、皆さんもご存知のとおり、ひかりはじめのホタルは藪の奥でそっとひかります。初めての時は、葉が何かの光でひかるのか、ホタルなのかわかりません。しかし、次第に光が強くなり、数も増し、そして飛び始

める、その感動を忘れることができません。おそらくその時に生まれてはじめてゲンジボタルを見たと思います。「これを残すことができなくて、何が環境保全なのか。」と思いました。

その後、三浦半島には、まだまだホタルの棲む場所が残されていることも知りましたし、全国に数多くのホタル保全活動があることを知りました。ここから及ばずながら、ホタルの会の仕事を手伝うことになったなと思います。話が少しそれましたが、とにかくホタルとの出会いが、環境を考えるという今の自分を導いたのだと思います。

現在は、前段に書きましたとおり海の利用と保全の仕事をしていて、日本ホタルの会だけがホタルと関わる場となっていますが、身近な自然を考えるシンボルとして、私自身の中の環境の原点として、ホタルという小さな生き物が大きく存在している、そう思います。6月になるといつもこのことを思い出します。



北海道で放流されているゲンジボタルとその問題

丸瀬布町昆虫生態館 喜田和孝

丸瀬布は北海道の北東部、網走からも旭川からも2時間ほどの、昔から昆虫採集で有名な町です。その昆虫を活かして町おこしが出来ない、地元ボランティアで空き家を改造し、生き物を展示したのが昆虫館の前身です。このボランティア「丸瀬布町昆虫同好会」はもともとホタルを飼育していたグループが呼びかけ人となって集まった会ですので、ホタルはもちろん、さまざまな生き物を飼育・展示してきています。

生き物を飼育する者がどうしても避けられない問題の一つに、「外来種」問題があります。当館も沖縄のチョウや外国の甲虫などを展示しているので、どちらかというと「外来種」については批判される側というイメージがあると思います。ですが、実際には「飼育」と「自然」の両側に大きく関わる施設という意味で、両者の間に立って外来種問題を「解決」していくにはうってつけの立場であると考えています。

さて、ホタルに関しては「外来種」とは何か、何が「問題」となるのでしょうか？

北海道では、もともといなかった「ゲンジボタル」が挙げられるでしょう。現在でも数箇所放流が続けられています。もちろん元は本州から持ち込まれているわけですから「外来」種であることはすぐにわかるのですが、「問題」となると何がいけないのか、ということになります。

外来種によって引き起こされる「影響」は、人への影響、産業への影響、生態系への影響…などいろんな段階のものが挙げられるでしょう。皆さんはどこまでを「問題」のある「影響」と感じるでしょう？

先ほどの「外来」ゲンジボタルについて見ると、人や産業には直接の影響は報告されていません。むしろ観光面で大きなプラスの効果があるそうです。

生態系に対してはどうでしょう？まずは放流個体が定着しているのか？という点ですが、私の知る範囲では人工的な水路に毎年放流しているようなので、定着はしていないのではないかと考えています。また、近隣でゲンジボタルを採集したという話もないことから、今のところは周囲に広がっているようでもなさそうです。もっとも、こういった「外来種」は導入後10年以上の「潜伏期」を経て気づくと大発生、というのが普通ですから現時点で判断するのは危険かもしれません。ちなみに道央の沼田町では「定着に成功している」と発表しています。

また、昆虫ですら北海道で1万種を超え、なお名前もついていないどころかろくに調査もされていないものが多数あるのですから「生態系への影響はない」などと断言できるはずはありません。

次に、交雑の問題です。不勉強のため正確な情報は把握していないのですが、ヘイケボ

タルとの間で交雑が起きる可能性があるとの事です。これがどの程度の割合で起きるのかによっては問題になります。もしかしたらもともとゲンジと混生しない北海道ヘイケはそれを回避する能力が本州より弱いかもしれません。

ここまで話していくと、より問題の大きいのはよそのホタル、たとえば本州のヘイケボタルを放流することだというのにピンと来る人もいるでしょう。もちろん同種ですから十分に「交雑」する可能性はありますし、「交雑」個体を見分けることも極めて困難です。

同種だから別に交雑してもいいじゃない？困るのは学者だけじゃないの？と思うかもしれませんが、実際にはそれぞれの生息地に適応するために生活史や生態などを独自に進化させていると推測されます。したがって、あまり離れた産地のものが交雑すると、その雑種はどちらの地域に適応するにも中途半端な性質を持ってしまい、多くは生き残れなくなると考えられます。つまり、一番迷惑しているのはホタル自身なのです。

北海道で本州産のヘイケボタルを放流している地域は現在でも少なくありません。その理由の一つに本州と違ってホタルの生息密度が低く、また気温が低いため活動も鈍く、ついでにクマも怖いので地元の「種親」を得るのが難しいことが挙げられます。残念ながら当町でも見つかっている生息地はわずか1箇所です、ホタルについての活動はしばらく足踏み状態になってしまっています。もっとも隣町では地道な保全活動と増殖・放流（もちろん地元の系統で）が始まっており、もうすぐ同じ町になることですからむしろその活動を応援していくべきかもしれません。

じつは北海道には北海道ホタルの会という長い（交流会時代を含めると25年以上）歴史を誇る組織があります。この会では当初から「よそのホタル」を放流することは控えるべきだと訴え続けてきました。その根拠は何も生態系云々という難しいものではなく、地域のホタルを守っていく活動なのだから、よそのホタルを持ち込んだのでは活動の意味がない、といういわば取り組む精神のあり方自身を問うたものでした。外来種問題が一般にも広く知られるようになったのはせいぜいここ数年のことですから、この方針がいかに先見にみちていたかがわかります。

現在北海道（庁）ではブルーリストという外来種のリストを作成し、公開しています。この中に「国内外来種」としてゲンジボタルはもちろんヘイケボタルもリストアップされています。もちろんすぐに規制がかかったり、駆除が必要になるような高いランクではありません。しかし、ホタルの保全というのが後世のため、子どもたちのためという活動であるならば、まだ違法でないから続けるという判断ではいけません。

だからといってホタルについての活動を恥じる必要もありません。ホタルの放流や保全に関わってきたことで、自然の難しさ、かけがえのなさなど多くのことを学んできたはずです。中には今振り返ると失敗だったこともあるでしょう。でもそれは、これから方針を見直してゆけばよいのです。

たとえば北海道でゲンジボタルを用いた観光を続けていくのであれば、野外への逃亡を十分阻止できるハウスのようなもので展示し、「北海道で唯一ゲンジボタルが生息する」ではなく「北海道にはいないゲンジボタルが

見られる」とPRするなど、外来種問題に配慮した軌道修正も見つかるでしょう。

外来種問題は原則論の普及と法整備が急がれる一方、こういったデリケートで個別に議論しなければいけない問題も無数に山積して

います。ホタルを通して自然と人とのかかわりを模索してきた者こそ、こういった問題を解決していく義務があり、また適任者でもあるのではないのでしょうか。

ホタルやカワニナの移動について ご意見を募集します。

.....

日本ホタルの会は、生物の移動について慎重であるべきであると考えています。本号では、丸瀬布町昆虫生態館 喜田和孝氏に北海道におけるゲンジボタル放流について、ご執筆いただきました。大変興味深く、示唆に富んだ内容であると考えておりますが、会員の皆様のお考えをお聞かせいただきたいと思います。当記事に関する意見をお寄せ下さい。

メール、郵便、ファックスでお寄せください。お待ちしております。

子供達の瞳がキラリと輝いたコオロギ相撲

東大和市 東口正美（主婦）

このたびは、コオロギ相撲に招待して頂きありがとうございました。

我が家には、9才の娘と7才、5才の息子がおります。みんな虫が好きですが、特に長男の孝一は大の虫好きです。彼を虫好きにしたきっかけは他にもない「ぼくの夏休み」というゲームでした。このゲームは、親の世代には回顧的内容で、昭和30年代の都会っ子が田舎でひと夏を過ごすというものです。そこには虫取りあり、釣り、凧揚げ、スイカ畑、絵日記、カキ氷、ガキ大将等々が登場します。親には懐かしいそれらが、現代の我が子たちには憧れの世界です。なかでも、自分達でつかまえた虫同士を闘わせる虫相撲の場面は特に何度も繰り返すお気に入りです。その後、更に巧妙につくられたムシキングというカードゲームが爆発的にヒットし、我が子たちも夢中になりました。

さて、我が家は多摩湖のほとりにありま



す。夏休みにはカブト虫もとれます。子供達はゲームだけでなく本物の虫にもものめり込んでいきました。庭に石ころで土俵をつくりカブト虫やクワガタ虫を闘わせて遊んでいました。しかし、ゲームのようにはいきません。そんな子供達が初めて本格的なコオロギ相撲に参加させてもらったのですから、その目が輝くのも当然です。「どこが一番面白かった？」と聞くと「筆先でコオロギをなでると色々な声でなくところ！」「自分のコオロギが勝ったところ！」との元気な答えが返って来ました。私は、大人も一緒に真剣になって行っているのも子供達を満足させているところだと考えました。「でも、ムシキングも楽しいヨ」とも言っています。

バーチャルの世界はお金を出せば、ある意味簡単に手に入り、強い刺激があります。それに比して、本物を手にするのは大変で、そこには喜びや感動がありますが、バーチャル



に慣れている子供達は、ゲームとは少し違うことに戸惑うのかもしれませんが。

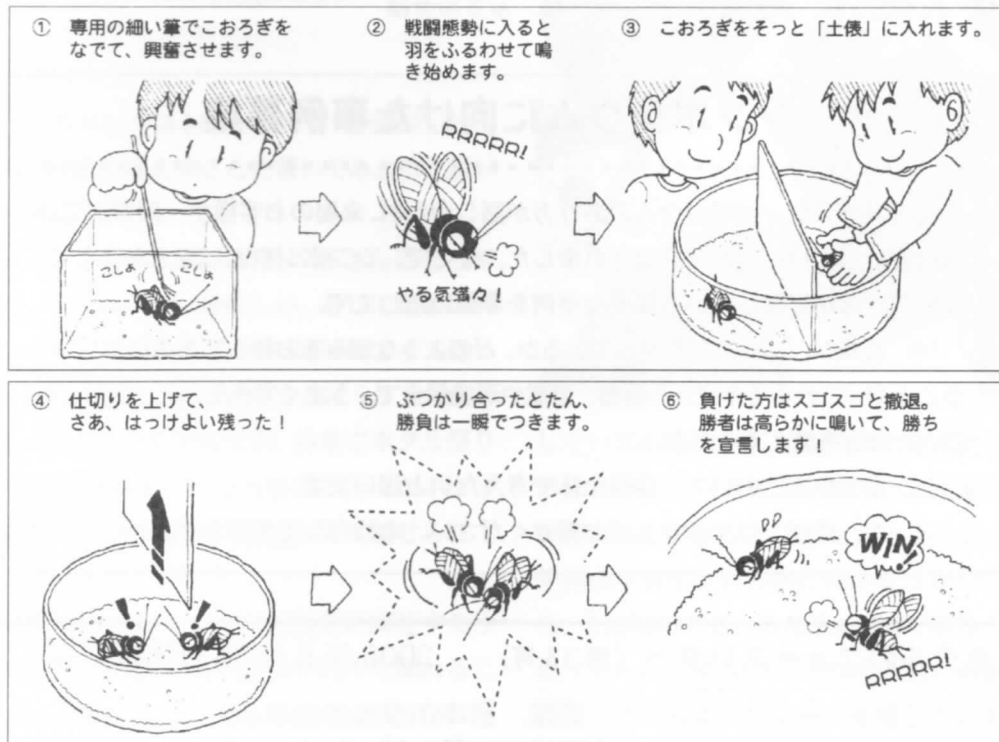
一度死んでも生きかえらと思って子供達が少なくないという現代。大人たちは子供達に本物を提供する手間や時間を惜しんではならないと思います。人間が生きていく事は

大変であり、大変だからこそ面白く素晴らしいのだと我が子と「実感」を重ねながら、子育てをしていきたいと思っています。

実は大の虫嫌いの母（私）は、コオロギ相撲を通して、こんな事を考えていました。

(2005・4・26)

■これがコオロギ相撲です！



事務局からのお知らせ

理事会報告

2005年4月16日に理事会を開催しました。6月の観覧会、9月の談話会の日程、内容が決定されました。また、シンポジウムのあり方について検討がなされ、対話を重視する方向性が確認されました。シンポジウムの詳細は、今後の理事会で決定されますが、逐次ホームページでご案内してまいります。

寄付金

次の方から寄付金をいただきました。この場を借りましてお礼申し上げます。

矢島稔様、川村善治様、小西正泰様、林長閑様、山本矩正様、常喜豊様、井上務様、古河義仁様、鈴木浩文様、荻野昭様、小俣軍平様、本多和彦様

シンポジウムに向けた事例募集

.....
上記の理事会でシンポジウムのあり方が話し合われ、来場のお客様が一層参加できる内容にしていくことが確認されました。そこで、シンポジウムに先立ちまして、会員の皆様が経験している様々な事例を募集いたします。

「今、皆様がどんなことで困っているか、どのような悩みをお持ちであるか？」ということや「これまでホタルの保護、育成や環境保全で、うまくできたこと、失敗したこと」などを教えてください。

シンポジウムにおいて、会場全体で考えたいと思います。

メール、郵便、ファックスでお寄せください。お待ちしております。

ホタルのニュースレター（第33号） 2005年6月30日発行

編集 日本ホタルの会事務局

発行 矢島 稔

156-0041 東京都世田谷区大原2-17-6

ステーションプラザ代田橋410

(株)オーグラム内 日本ホタルの会事務局

TEL & FAX : 03-3328-7379

e-mail : omata@nihon-hotaru.com

URL : <http://www.nihon-hotaru.com>

印刷 システム印刷株式会社

191-0031 東京都日野市高幡1012-13

TEL : 042-591-1411 FAX : 042-591-7701

